

希臘式獅子像を作り噴水口は臺柱の上端鱗形の周圍に六ヶ所其他に六十四個所を設け水を傘形に落下せしむる構造なるが所々に色電灯を裝置したれば夜間は一層の美觀を呈すべし 尙ほ噴水塔の高さは四間、坪数は六十六坪五合として周圍の圓形池に漙へたる水を川上式唧筒ゼツを用ひ循環法によりて噴水せしむる仕掛なり。

〔『書畫骨董雜誌』第六号。明治四十年四月〕

△模型日本橋々上の家康と道灌の銅像据えられ候。家康は陣羽織姿武裝の者、道灌は山吹に見覺ある狩の裝束に候。いづれも美術學校にて原型より吹き上げしものゝ由に候〔實際は乾漆像。―編者註〕。又石膏にては第二號館の浮彫、第三號館前の綾織吳織の立像などあり候。いづれも美術學校作の由〔後者は光雲個人の作―編者註〕。會より是等の爲感謝狀を出す由に候。美術館外車坂門内に白井雨山氏作紀念銅像標本出で候。胸像は狩野芳崖にして臺に附ける裸體婦人は其傳記をひろぐるに候。面白く見られ候。

〔『美術新報』第六卷第二号。明治四十年五月五日〕

●會場内の諸彫刻 第三號館染織物陳列場入口の左右に陳列せる吳織漢織〔漢織は穴織に同じ。―編者註〕は石膏立像等身大にして、原型は高村光雲氏の手に成り、美術學校にて製作せしもの、又模型日本橋中央左右にある太田道灌、徳川家康の二銅像〔乾漆製―編者註〕は白井雨山氏の原型製作にかゝり同じく美術學校の手に成り、第二號館のアポロ、ヴィナス、童兒の石膏亦美術學校にて製作せしものなりと。

（同誌第六卷第三号。同年同月二十日）

これらの製作品のうち白井雨山原型の太田道灌像（乾漆）は東京芸術大学芸術資料館に收藏されており、東京都庁前の太田道灌銅像も同一原型を参考にして作られた。なお、改築日本橋の裝飾はその後変更して渡辺長男原型の獅子と麒麟の銅像が取り付けられた（明治四十四年）。

⑩ 文展開設

明治四十年秋、第一回文部省美術展覧會（文展）が開催された。この官設展覧會の開設について正木直彦は次のように記している。

話が少々前後するやうであるが、明治三十三年に獨逸に居つた時、私は岡田良平、福原鏝二郎の兩君と共に、アイズトリフ、イタリとがあつた。其の時、イタリの公使は牧野伸顯さんで、イタリから轉じられたばかりの處であつた。

會つて話して見ると、大層美術のことに趣味を持つてをられ、且つ歐洲各國の美術施設にも精通してをることが判つた。しかも牧野さんは、其の時、吾々三人が揃つて文部省の役人であつた爲か、しきりに日本に於ても文部省あたりで、美術の奨勵法を講ずべきであるとして説せられ、それに就いては是非、フランスの如きものを文部省が主催すべきである、と云はれたのであつた。

勿論、吾々はこれに大いに賛意を表し、共々その實現に努むべ

きことを約したのであつた。

然るに明治三十九年に西園寺内閣が組織されるに及んで、牧野さんが文部大臣になることになつた。そこで吾々は牧野さんの歸朝を待受けて、先年、維納^{〔ワイナ〕}で述べられた佛蘭西のサロンの如きものを文部省が主催する、といふことを要望したのであつた。丁度、これと内外呼應したやうに、子爵の黒田清輝君や、帝大教授の大塚保次君等も、政府に於て恆久性ある美術の奨励機關を設くべきことを建議した〔国立国会図書館牧野伸顯文書中の大塚保次提出「美」
〔衛界刷新〕「策」〔年記なし〕「蕩蕩」をさすか。〕これによつて、牧野さんも大いに心動かされて、文部省美術展覽會といふものを設けようと云ふことになつた。

丁度、翌年には東京博覽會といふものが催されたのであるが、此の間によつて議が熟して、先づ美術審査委員會といふものを設けることになり、専門學務局長であつた福原君と美術學校長であつた私とで、其の官制の草案其の他の準備に當ることゝした。その官制の草案が五月に出來、それを内閣へ提出した。そこで、その官制が法制局で審議されてゐる間に、審査委員の詮衡をしようといふので帝大總長の濱尾新、實業學務局長の松井直吉、女子高等師範學校長の高嶺秀夫、京都の高等工藝學校長の中澤若太、それに福原君や黒田清輝君、私等が集つて、事を進めて居つた。

〔回顧七十年〕正木直彦著。昭和十二年、学校美術協会出版部

これによると正木、岡田、福原らは明治三十三年にオーストリア

公使牧野伸顯に會つてその美術奨励に関する説を聴いたことがきっかけとなつて文部省主催の美術展覽會開設を計画し始めたらしい。官設展覽會を開設することは既に明治十年代末から岡倉寛三らが提唱していたことであり、岡倉はこれを明治二十八年十一月に当時文部次官であつた友人の牧野伸顯に提出した「美術會議設置ニ付意見」〔岡倉天心全集〕第三卷。昭和五十四年。平凡社〕のなかでも提言している。牧野は或いはこの意見書から多分に示唆を受けたのかも知れない。正木は牧野に啓発されて帰国後は美術行政促進のための美術局設置運動を積極的に進めた〔177頁参照〕。

文展開會に先立つて、四十年八月十三日、正木直彦は美術審査會主事を命ぜられ、次の四十二名が美術審査委員に任命された。

第一部（日本画）

（兼第二部員）	主任	工学博士	中 沢 岩 太
（主第二部員）		理学博士	松 井 直 吉
（兼第三部員）		文学博士	大 塚 保 治
（主第三部員）		工学博士	塚 本 靖
		高 嶺 秀 夫	
		岡 倉 寛 三	
		○ 川 端 玉 章	
		○ 荒 木 寛 敏	
		今 泉 雄 作	
		文学博士	藤 岡 作 太 郎

第二部 (洋画)

(兼第一部長)

主任

(主第一部長)

- 橋本雅邦
- 寺崎広業
- 下村晴三郎 (観山)
- 菊池常次郎 (芳文)
- 竹内恒吉 (栖鳳)
- 野口親 (小蘋)
- 今尾景年
- 川合芳三郎 (玉堂)
- 横山秀麿 (大観)
- 山元金石衛門 (春挙)
- 松本楓湖
- 小堀鞆音
- 理学博士 松井直吉
- 工学博士 中沢岩太
- 医学博士 森林太郎
- 黒田清輝
- 男爵 ○岩村透
- 浅井忠
- 松岡寿
- 久米桂一郎
- 岡田三郎助
- 和田英作

第三部 (彫刻)

(兼第一部長)

主任

(主第一部長)

- 中村不折
- 小山正太郎
- 満谷国四郎
- 工学博士 塚本靖
- 文学博士 大塚保治
- 高村光雲
- 石川光明
- 竹内久一
- 長沼守敬
- 白井保次郎
- 新海竹太郎
- 新納忠之介
- 大熊氏広
- (○印東京美術学校教官)
- 審査委員の人選には一波瀾があった。正木直彦はこれを前出『回顧七十年』の中に、前掲文に続けて次のように記している。
- すると其の時、新聞紙上に、
- 九鬼隆一男爵が京都へ行かれ、大勢畫家の集まつた席上で、「今度、文部省に美術審査會といふものが出来る。これは我輩が文部大臣に勧めてやらしたもので、自分は審査委員長になることに内定して居る。それに就いて京都では、誰と誰を審査員にして

やらう」と云ふやうな事を述べられた。それで、指名を受けた人々が非常に喜んで、前祝ひの會をした——

と云ふやうなことが報道された。これは京都の新聞に先づ出たのであつたが、すぐに東京の新聞にも出た。

すると其の事を知つて、先づ黒田清輝君が、

『審査委員長といふものが九鬼さんに決つてゐるのか？ 九鬼さんに決つてゐるのなら我輩は一切この事に關係しない。』

と云ひ出した。續いて外にも同じやうなことを申出る人が出て來た。吾々は困つてしまつて、牧野文相に、九鬼さんを委員長に頼むと云はれたかどうかを確めた。すると牧野さんは、

『いや、別に頼みはせん。たゞ、美術界の長老だから、近く文部省で斯ういふ事をやるから、よろしくお頼み申す、と云つたのであつた。』

と云ふ。そこで吾々は、

『九鬼さんが委員長になるのであつたら、これに關係することをお免蒙る、と申出て居られる方が大分あります。ですから、九鬼さんを委員長にしたのでは、折角の計劃も成立しなくなるでせう。』

と云つたところ、牧野さんも驚いて、

『君等で何とか工夫し給へ。……』

と云ふことだつた。仍て、福原と私とが熟議の結果、内閣で審議中の官制を一應戻して貰ひ、その中に、審査委員長の任命は文部大臣の奏薦による、とあるのを改めて文部次官を以て之に充つ

——と云ふやうに役目でそれが決定してしまふことにし、大臣の承認を経て再び内閣に進達したのであつた。

斯うして明治四十年の六月五日に、勅令を以つて官制が發表されたのであるが、それによると、文部次官は澤柳政太郎君であつたので、委員長といふことでは、九鬼さんの鼻をあかすやうな結果となつた。

九鬼さんは激怒して文部省へ來られ、大臣はじめ吾々を詰られたが、文展が生れるか生れぬかの境だつたので、背に腹は替へられず止むを得ぬことだつた。

扱て、其時の詮衡の結果として、日本畫ではどうしても橋本雅邦を入れなければならん、と云ふ事になつた。これは全會一致さうなつたのであるが、一方これには美術學校の騒動以來、岡倉君を中心にして日本美術院といふものが創立され、雅邦さんはそれと行動を共にしてゐる。そこに難色があつた。

交渉をして見たところ、雅邦さんの云ふのには、

『私はお受けしてもよろしいが、それには岡倉覺三さんも御一緒に願ひたい。』

との事だつた。岡倉君のことは、先年の騒動以來、文部省ではなるだけ關係せぬやうに、といふ空氣が醸されてゐた。それだけに、今回の企てに就いては、誰からも岡倉君の話は出なかつた。

然し、雅邦さんは岡倉と一緒になければお受けしないと云ふ。仍つて其の事を議に掛けたところ、

『岡倉君が一枚入ると、その爲に全體の統制が亂されて困るこ

とになりはしないか?』

といふので、誰も首を傾げてゐる。すると、中澤岩太君が、

『いや、岡倉なら我輩が抑へ付ける。岡倉は我輩にとつて同郷の後輩である。我輩を日本畫の審査主任にするならば、彼に問題は起させん。雅邦はどうしても入つて貰はんならんのだから、止むを得まい。』

と云ふ。そこで、よかろう、と云ふ事になつて岡倉に交渉をしたところ、岡倉曰く、

『私一人では困る。横山大觀と下村觀山をお取りなら、私も微力を盡しませう。……』

さあ、斯うなると、大分問題が紛糾して来る。だが、それでは困る、と云へば、雅邦までが駄目になつてしまふ。そこで、

『止むを得まい。……』

と云ふことになり、その代り、別派の若い人を多く入れて、それに對抗させようと云ふことになつた。斯うして、東京からは前記の外、老大家として川端玉章、荒木寛畝、山名貫義、と云つた人の外に、寺崎廣業、川合玉堂、小堀鞆音といふやうな人が入り、京都からは竹内栖鳳、菊池芳文、山元春舉等が委員に選ばれたのであつた。

尙、日本畫を第一部とし、西洋畫を第二部、第三部が彫刻といふやうなことで、それ／＼審査委員を依頼したのであるが、當時は、それらの作家以外、美術批評家として、前に述べた詮衡委員の人々も、その審査に加はつたのであつた。

このように、波瀾が生じたのは主に日本画部門についてであつた。そして、審査委員が発表されるや、日本美術協会や同会寄りの比較的若手の画家の団体である日本画会はこれを自分たち「日本画正派」ないし「純正日本画」を踏みにじる措置であるとし、不出品を決め、委員発表の翌日（八月十四日）正派同志会を結成し、文部省に圧力を加えようとした。これに対して日本美術院をはじめ、大同絵画会、二葉会、紅児会、烏合会、巽画会、国香会、江戸ッ子会、天真社などは翌九月一日に凶画玉成会（会長岡倉覺三）を組織して結束した。

第一回文展は同年十月二十五日より十一月三十日まで上野公園元東京勸業博覧会美術館で開催された。出品状況は次のとおりで、相当厳選であつた。

部門	応募数	出品（入選）数	審査委員出品
日本画	六三五	八九	一〇
西洋画	三二九	八三	八
彫刻	四六	一四	二
計	一、〇一〇	一八六	二〇

日本画部門では竹内栖鳳の「雨霽」、下村觀山の「木間の秋」、菱田春草の「賢首菩薩」、寺崎広業の「大仏開眼」、野田九浦の「辻説法」等の力作が発表され、革新派の力量が一般に強く印象づけられた。西洋画部門では本校卒業生和田三造の「南風」、小林万吾の「物思」等が、彫刻部門では新海竹太郎の「ゆあみ」等が好評を博した。

本校関係者の出品(入選)について言うと、日本画部門では若手教授の下村観山と寺崎広業が上記の作を出品し、助教教授結城素明も新しい作風の「無花果」を出品したが、老大家の教授川端玉章は平凡な「木下闇」を出品したのみで、同荒木寛敏は正派同志会への遠慮があつてか不出品であつた。卒業生では前出の下村観山、結城素明、菱田春草や横山大観、木村武山、本多天城等に混つて吉原雅風(義雄。三十六年卒)、勝田蕉琴(良雄。三十八年卒)、平田松堂(榮二。三十九年卒)や四十年三月に卒業したばかりの桐谷洗鱗(長之助)、荻生天泉(守俊)、山村耕花(豊成)等が出品した。西洋画部門では教授黒田清輝が「白芙蓉」を、同岡田三郎助が「高橋義雄氏肖像」ほか肖像画二点を、助教教授小林万吾が前出「物思」を出品。卒業生ではこの小林万吾や山本森之助、林竹治郎(二十五年特別の課程卒)、中沢弘光、庄野宗之助、倉田白羊(重吉)、岡吉枝、森川松之助、佐藤均等先輩たちとともに跡見泰(三十六年卒)、橋本邦助(同)、渡辺亮輔(同)、和田三造(三十七年卒)、橋口五葉(清。三十八年卒)、森田恒友(三十九年卒)、五島健三(四十年卒)が、さらに在校生では有田四郎(四年生)、久米福衛(同)、加藤静児(三年生)、九里四郎(同)、森田太三郎(同)、田辺至(同)、山脇信徳(同)などが出品した。次に彫刻部門では教官の出品は無く、卒業生の長愛之(三十三年卒)、山田政治(同)、細谷三郎(三十五年卒)、毛利教武(三十六年卒)、杉本伝(同)、藤井浩祐(四十年卒)等と、三年生の松井信次が出品した。これら本校関係者の全体に占める割合は、日本画部門が一五%、西洋画部門が三九%、彫刻部門が五六%と順次多くなつてゐる。日本画部門は東京を中心とする関東勢と京都を中心とする関西勢の出品が六三対

三六で、関西勢の活躍も著しかったため本校関係者の出品の占める割合は小さかつたが、西洋画と彫刻の部門は関東勢が大半を占め、中でも本校関係者の活躍が目覚しかった。落選者の中にも本校関係者は多勢いたに違ひない。北村西望と建畠大夢は京都市立美術工芸学校を卒業してこの年本校彫刻科に入学したばかりであつたが、大急ぎで制作したものを出品して二人とも落選したという(私の履歴書「北村西望。昭和五十七年五月二十七日〜同年六月二十四日『日本経済新聞』)。

入選者発表当時の模様を小糸源太郎は次のように書いてゐる。

文展が初めて創立されたのはたしか明治四十年で、私は未だ美校の金工科に在學中であつた。その年の修學旅行が伊豆半島で、その歸り途、偶々小田原か國府津で買った新聞に初めて入選者の氏名が發表されてゐた。生徒達はこの華々しい政府展の入選發表に興奮して急に騒ぎ出した。當時金工科に籍は置いて居たものゝ行末は必ず油畫かきになるつもりであつた自分も興奮して同じやうに新聞を引つぱり合つたのを記憶してゐる。

洋画の上級生にひどく派手な一組があつて、この旅行にどこで集めたか穴だらけな山高帽子の揃ひを冠つて、その破れた穴から長い髪の毛をつまみ出して、その又先へコスモスの花を結びつけて——これが後のコスモス會即ち藤田嗣治、田邊至、長谷川昇、池部鈞等々錚々たる顔振れを生み出したク、ラ、スだけにこの第一回の發表にも相當の入選者を出したらしく一層元氣づいて騒ぎ廻つてゐた。私と同級に大野「隆徳」君、小寺「健吉」君、富田「温

一郎」君等が居て學科の時間には同じ教室で顔を合せてゐたのだが、私を指導してくれたのはこのコスモス會の連中だつた。特に藤田、長谷川、加藤「静児」の三氏にはいつも、作品の批評をしてもらつてゐた。

〔憶ひ出すまゝに〕小絲源太郎『日本美術』第二卷第四号明治美術研究号。昭和十八年四月。なお、伊豆修学旅行の詳細は『東京美術学校校友会月報』第六卷第三、第四号参照。〕

確かに、藤田嗣治らのクラス（西洋画二年）では入選者が五人も出たのであるから、生徒の興奮も尋常でなかつたに違いない。

文展は、その是非は兎も角、画家や彫刻家の登龍門となつた。したがつて本校の生徒たちは否応なしに関心を持たざるを得なくなつた。先輩の和田三造は「南風」に続いて「燐燻」（四十一年第二回文展）が最高賞の二等賞を獲得して一躍画壇の寵児となり、文部省留學生に選ばれた。美術の分野の文部省留學生は従来本校教官、卒業生に限られ、帰国後本校の教壇に立つことが条件とされていた。（和田は正木直彦や黒田清輝の期待に反して教官となることを辞退した。）このような美術家奨励法は生徒たちの夢をかきたて、制作意欲を燃え上らせる一因となり、そこにこれまでとは違つた活気が生じたが、反面、文展入選のみを目ざし、平常の勉強を疎かにしかねない風も生じ、学校当局を悩ますことともなつた。なお、本校は創設以来いわゆる純正美術と美術工芸を同列に置く立前であつたので、文展において工芸部門が設けられなかつたことは本校工芸方面の人々の憤慨を招き、彼らを中心とする工芸の文展参加運動が開始されること

となつた。

⑪ 大沢三之助の留学

本校図案科主任教授大沢三之助は、明治三十九年十月二十四日付で文部省より「建築裝飾研究ノ爲満三箇年間英國佛國及伊國へ留学ヲ命ス」との通知を受けた。留学期間中の図案科建築学の授業は、大沢に代わり東京帝国大学工科大学助教関野貞に囑託された。留学期間中の履歴を「東京美術学校旧職員履歴書」より転載する。

明治四十年一月廿四日 横濱解纜留學ノ途に上ル

同 四十一年四月廿七日 明治四十一年八月三日ヨリ英國倫敦ニ

開催セラルヘキ第三回萬國美術會議ヘ

出席ヲ命ス(文部省)

同 四十三年七月十一日 日英博覽會橫濱正金銀行支店設計ノ爲

名譽大賞ヲ受ク

十月十九日 歸朝ス

『東京美術学校校友会月報』の通信記事によると、大沢は、明治四十年二月二十四日バンクーバーに到着し、シアトル、サンフランシスコ、オークランド、ニューヨークを経て、明治四十年三月渡英したことが知られる。同四十一年の秋から冬にかけてパリに滞在、同四十二年秋にはイタリアを訪問している。明治四十三年三月には国費留学満期となるが、私費留学延期を願い出て許可されている。同四十三年九月三日英国発の加茂丸にて帰朝。帰朝後は、建築学会の常議員となる。また、明治四十四年の四月と五月の『美術新報』に「第三回万国美術會議に就いて」の報告を発表している。